

秋水泡語

卷の七

二〇〇三年

アランが詩について語る言葉はほとんど人間の核心を明らかにする。

「詩は魂の鏡である。この律動をもち韻をふんだ言葉の不可思議な助けなくしては、意識は機械を超越した彼方に目覚めることは出来ない」

「精神は自己の内的生をよりよく把握し、またこの詩の働きによってそれを解放する」

「詩は喜びにもいつその堅固さを、事物のようすがたを与える」

「詩は外界の対象によつてのみわれわれの思想を規制する」……

「美しい詩の一編は、果物が熟れるようにゆつくりと熟れてゆく」

「詩人は、……この生命のリズム、それから出発し、それを乱すことなく語を呼び集め、抑揚、諧調、音の響きにしたがつてそれらを配置する。そうやっておのれの思想を発見するのだ」

「歌は生き、耐え、克服するための一方法」……

智顛の「虚空のなかに樹を植えて華を得……」という言葉に付き随い、

止観して四季に華得る時を待つ

一月一日  
初あられ地をはねおどり明ける年

今生にはねる霰の一つとして

一月三日  
果てしなく繰言を繰る老いた母言語||世界の残る一筋

一月四日  
初雪に凍えて友と会う夕べ

一月十日  
目を閉じてコトダマを聞くステーション

雑踏に厚着した顔千の顔

内と外冬の夜汽車の窓に見る

ヴァレリーの年譜見ながらぼんやりと夜汽車の揺れに体あずける

一月十二日  
朝ぼらけ船はエンジン響かせて航跡長く湾奥を行く

一月十五日

雪中を烏帽子の鳥が食探す

一月十八日

目覚めればまだ明けやらぬ床の中とりとめもなく思念はめぐる

一月十九日

「一試験監督者の願い」

その昔 抜群の成績で科挙の試験に合格した人がありました

その人はまた 時代に抜きん出た詩をつくり

その才知ゆえの不遇が その人となりを深くしました。

そのまた昔 科挙の試験に及第しなかつた人がありました

その不遇は その人を大きくし

その詩を高めへと到達させました。

そのまた昔 試験にも地位にも無縁な人がありました

その選びとつた境遇は その人を遠く導き

その詩は 詩と人のあり方の手本となりました。

その人たちは それぞれの生を豊かなものにし

その詩は 人の心深く届き響かずにはいません。

今 新しい試験制度にいどむ若者たち  
成功する者も 失敗する者も  
試験によらない道を目指す者も  
その前途に 可能性を開花させますように。

しかし、疑問の多い入試制度にかり出された者は、身心を消耗する  
のでもありません。

官制の乾燥無味の監督を完了しおえ寒の日々行く

一月二十七日 美しくないことをして不条理な身心を乗せ車駆る道

一月二十九日 わたくしを雪ぐ雪降る雪に立つ

わが家に寒さはつのる介護度五

二月五日 新春に大音声の冬の雷

二月十一日

「藤田省三の宣告に立ち尽くして」

おお、全ての言葉が嘘になった時代  
はたして五七の言葉の僥倖にたよって  
あるいは新奇な言葉の組み合わせを分ち書きして  
詩歌に似たものに近づけるか

おお、全ての言葉が嘘になった時代  
黙して見詰め尽くすほかに世界を賛嘆し写生することが可能か  
不分明な音声をうそづくほかに抒情の可能性があるか

おお、全ての言葉が嘘になった時代  
言葉によって何かを創り出すことができるか  
おまえのつぶやきさえはたして行き届くか

おお、全ての言葉が嘘になった時代  
まだ生きているものがあることだけが一筋の希望  
静まった宇宙に律動や調べの残響を聞け

二月十五日

桃源を知らずに過ぎる梅の土手

二月十九日

憤り知って雨水うすいが肩なでる

二月二十日

風神が冬の雄叫び春間近

二月二十四日

春雨や磁針は今日も北を指す

春耕も雨読も塞ぐ世にあつて磁針と並び瘦軀を保つ

二月二十六日

この家にも季節の恵みしらす食う

二月二十八日

二月尽眉間のしわを抱いて寝る

三月二日

荒れる胃に遍歴し来たヨーグルト

三月七日

岡城の石垣を飛ぶ藪椿

石仏のひざで春寒侘びる草

磨崖仏見て食う春の小鯨寿司

三月八日  
山の湯に逗留せよと春の雪

三月十二日  
東城に梅の残り香尋ね行け

三月十四日  
身心とつちく脱落ストック香る闇

雨煙る闇に辛夷が花開く

三月二十一日  
朝茶漬け啜って見入るイラク戦  
(彼岸の中日に)

着弾の炎に命砕け散るテレビ画面が見せぬ血しぶき

クラウゼヴィッツの政治がまがましいと驚くな



古来人間の政治で血みどろでなかったものを数えてみよ  
メフィストフェレスがそう言い  
わたし、ファウストは、美味なりゾットを食っている。

Liveにて彼の湾岸の戦見る死の幻影は彼岸にあらず

三月二十五日

同僚が誰が聞いても理不尽な仕打ちを受けたのを、わたしはなんの力を貸すことも出来ない。一休禅師の言う人生の一里塚の日、いつもより遅く建物を出たら、既にシルエットになりかけの風景が胸の奥深くに何か語りかけてきた。

春がすみ暮れる地平に樹々が立つ空なる意味を試みながら

三月二十七日

廟の名は瑞鳳の殿彼岸過ぎ

みちのくの春まだ遅く殉死した人の数ほど卒塔婆が立つ

三月二十八日  
襖絵に囲まれ春の夢を見よ

三月二十九日  
金華山帰路は銀波の春の海

三月三十日  
支倉の墓へ椿の坂上る

四月二日  
窓越しに花見する人 [Be patient.]

潰瘍の因をつくった悪人を話題に見舞う力無き者

四月三日  
精神の本来的なあり方をよく体得し世界見据える

G・ベイトソン『精神と自然』読了。

四月四日  
娘から貰った傘で花の下

四月五日  
蝶、鳥、魚、犬を識別して名を言えぬ時が人には来る。

眼は開いて物を認識できぬ人限られた名の幻影の中

アメリカ合州国によるイラク征伐、統一地方選挙：と、世の中は移り行き、わたしも私事に執着して日々を過ごしている。不屈のガンジーにも、「わたしにできることは、ただじつと成すことなくすわって、歯を食いしばっていることであつた」という時があつた。

四月十四日

わがことにとらわれている間にも森の若葉はすでに湧き出す

四月十五日

脚一つ欠いた犬行く赤芽垣

四月二十一日

無句にして春全開の時過ごす

四月二十二日

陽に酔つて窓のガラスを払う蝶

目を閉じて蝶の謡いを聞くあわい

四月二十五日

饅頭を下賜され龍馬ふところ手

四月二十六日

小手毬の水替え感受整える

五月一日

惜春の情を埋める身の重さ

軽やかな蝶も夢見に終わる時

五月四日

英人と青葉を見やる露天風呂

五月十七日

広大な白雲の上すきとおる果てしない青飛ぶ孫悟空

(旅へ)

窓閉めて五月の光さえぎって皆仮眠する天の鳥舟

天下るときはいかなる神の名を負うてこの身は振舞うものか

窓超えて地平に沈む太陽が機中貫く北欧の九時

五月十八日

教会の鐘に五月の桜散る

## 「サン・ファン・パウテイスタ号余聞」

\* \* 様

三月末サン・ファン・パウテイスタ号を一緒に見学できて喜んでいましたら、今度十八日から二十日までストックホルムであったワークショップに出席した折に、ヴァーサ(Vasa)号という海底から引き上げられた帆船を見る機会を得ました。二ヶ月足らずのうちに十七世紀初めの二つの帆船を見て感興を覚え、貴兄に聞かせたくなりました。しばし、お耳を拝借します。

サン・ファン・パウテイスタ号が出航した十五年後、一六二八年、スウェーデンが国を挙げて最新鋭の軍艦を建造しました。長さ 61m + bowsprit 8m (舳先から船尾まで 47.5m)、メインマストの高さ 52.5m。石巻市サン・ファン館をインターネットで覗いたら、パウテイスタ号は全長 55.35m、高さ 48.8m ということで、わがパウテイスタ号の方が小ぶりであります。初航海を迎えたヴァーサ号は上下二層のデッキに重砲を並べ、国王の希望によりマストも高めにされた威風堂々たる雄姿で現れ、貴族市民が見守る中乗組員の家族も乗船したお祭り気分浸っておりまして。そこへ一陣の突風が吹いて船は大きく傾き、砲門からどつと海水が流れ込み、ついには渦を巻いて海底二十数メートルに沈没したのです。女

子供を含めて三十余人の犠牲者が出る惨事となりました。以来三百数十年間海底にあったその船を引き上げて博物館に展示しているのです。S.S.以上が元の素材で復元されたその船は、板の端々が腐食して異様な外観を示しています。それだけによけいに最強の軍艦という印象を与えます。

バウティスタ号の方は、仙台藩という一地方の経済的な条件と、初めて日本で竜骨を持ったヨーロッパ式の本格的な構造船を建造すると言う技術的な条件から、既存の設計図を元に建造されたと想像されますが、現に太平洋を横断したのですから、まずよく出来たと評価できるでしょう。

さて、ブローデル著『地中海』、ウオーラーズティン著『近代世界システム』によれば、一六世紀後半にヨーロッパ経済の重心は、イタリア・スペインの地中海からオランダ・イギリスの北西ヨーロッパに移動したのです。その中心都市アムステルダムが、以前にはハンザ同盟諸都市が支配していた北海・バルト海交易を掌握するようになっていました。バルト海沿岸諸国の物産はアムステルダムに集まりました。その時、スウェーデンはバルト海で頭角をあらわそうとして先の事件が起きたのです。オランダは北海・バルト海交易での有利な立場から、大西洋に乗り出したのです。オランダ・イギリスは、ポルトガル・スペインの後を襲って、北米東岸、南アフリカ、インド、東南アジアへ進出しました。

環シナ海・東南アジア諸国交易へのポルトガルの参入はその交易を刺激し、九州人、琉球人、明人、(倭寇)、東南アジア諸国人達が一層活躍する時代になりました。スペインは、ローマ教皇の裁定により名目上西から(アメリカ側から)進出し、フィリピンを領有しました。遅れてオランダ・イギリスも進出してきて、ヨーロッパの四カ国が極東の九州・西日本まで来て鞏当を演じました(この頃の影響が現代の東ティモール問題にまで残っています)。日本人町が東南アジア諸国に出来たのは、こういう情勢下でした。西日本は世界と交わる機会をつかみかけていました。これが、兄の関心をひくヨーロッパと日本人の接触の舞台であります。スペイン・ポルトガル人によるキリスト教の布教もこの世界情勢を背景としてなされました。

日本の辺境にあつて遅れて近世日本に参加した伊達正宗は、秀吉の朝鮮侵攻に参軍し九州島の活発なヨーロッパとの交易を見て、参入を希望したに違いありません。一方、オランダ・イギリスに押されていたスペインは、東北沖を東流する海流に乗る北太平洋航路が自国の領有する北米西海岸に通じる比較的安全な航路であることに目をつけたのでしよう。両者の地政学的な利益が一致して、支倉常長のスペイン派遣が企画されたのです。サン・ファン・バウティスタ号は、支倉らがヨーロッパに行っている間に一度日本に戻り、再び支倉を迎えてフィリピ

ンまで帰り、そこで支倉は別便に乗り換え日本に戻ったようです。オランダ艦隊に圧迫されていたスペインは、サン・ファン・バウティスタ号を買い上げ、自国艦隊の増強を図ったと、サン・ファン館資料は述べています。

こうして、極東の島国の辺境とヨーロッパの半辺境のスウェーデンで建造された二隻の帆船は、一七世紀第一四半世紀の国際情勢の下でつながっていたのでした。

日本がヨーロッパとの交流を続けていたらどうなったかという歴史の「もしも」という問いがよぎりますが、しかし、日本は鎖国へ向かい、支倉は不遇な晩年を過ごしました。わたしの訪れたひっそりとした支倉の墓は複数の候補の一つにすぎません。資本主義経済が立ち現れて来たといっても、ヨーロッパ経済は世界を一つのシステムに統合するほどではなく、四国の極東貿易は中継貿易に過ぎず輸入超過でした。帆船は、何ヶ月もの航海を要して、鎖国を押し止めることはできなかつたのです。それから二百数十年後、産業革命を経て自国の製品の販路を求めるようになったヨーロッパは、蒸気船という交通の革新によって再び極東の島国に到来しました。日本を世界に組み込んだのは前の時には存在しなかつた新興のアメリカ合州国でした。一九世紀日本は、その潜在能力の先駆的な現れとして、サン・ファン・バウティスタ号を持っていたのです。村田蔵六が招かれて



新しいヨーロッパ式艦船を建造した(蒸気機関を作ったのは日本の職人でした)のが宇和島というのは、単に賢侯がいたという偶然ではないかもしれません。伊達宗城の頭の隅には、先祖のサン・ファン・パウテイスタ号建造の昔話があったはずで。

一九世紀世界経済の中心地であったロンドンから東京まで、今日の飛行機は一時間でわたしを運んでくれました。ニューアムステルダムもといニューヨークの金融街の動きが、わたしの旅行費用の多寡を決め経済生活に影響を与えます。四百年の歴史の展開をふり返ると感慨尽きないものがあります。

再建あるいは復元された二隻の一七世紀の帆船が、わたしを歴史の連続の中に立たせてくれました。

五月二十九日 西日射す薄暑の壁に蝶の影

六月六日 あじさいを巡って飽きぬ蝶一人

六月七日 手ずからの庭にめぐみの金枝梅

六月八日  
風受けるほおのふくらみ枇杷の種

盛り上がる匂いの森や栗の花

六月十二日  
蛙鳴くかなたに都市の百の音

ガザからの砲声届く初夏の闇

閉塞の無明、有事の秋ときを待つ

六月十三日  
触針を伸ばす胡瓜は庭の内

六月十五日  
草原で鞆丸を食うタレント嬢

(TVの映像、羊のもの)

六月二十一日  
新聞土曜欄に中国女性革命家の秋瑾が「秋風秋雨愁殺人」という言葉を残して刑場の露と消えたことに材料を得た記事があった。ふと、対句が浮かぶ。季節はずれであるけれど、俳諧をもって反歌とする。

春風春雨春殺人

はるとあき過ぎて白頭春愁う

六月二十二日

『摩訶止観』読む耳に聞くほととぎす

わが念に法の托卵ほととぎす

夏至の日の日中を急ぐ消防車

百円で労働を買う労働者搾取と疎外商うシヨツブ

六月二十三日

水田に百万の円描く雨

六月二十五日

雨安居の朝餉争論具足の身

六月二十八日

掌中の胡桃かちかち音を立て如意と不如意のこの世を示す

新聞の広告の欄知った名を見つけて思う趣味の雅と俗

六月二十九日

夏点前ゲームを知らぬ座の一人

半解の七字の句を見、薄茶飲む

半夏生、貧家の茶室、飯の床

七月一日

傘逆に開く子と行く通学路

萩散らす雨に未開の百日紅

半夏生暮れて狂語を聞く修行

おもむろに頭めぐらし撃つヤモリ

七月七日

フンボルト目隠しをして大学の変質を見る悲しみ耐える

その知性鍛えたこともない者が痛みもなしに学府扱う

夕刊に、予算削減による国立大学の機能の縮小に抗議して、ベルリン・フンボルト大学の創立者ともいうべきフンボルト兄弟の銅像に目隠しがされている写真。その基本理念は、「知性の使い方を訓練する」ことだった、と。

白き蛾がヤモリを弄し飛んで去る

七月九日

単衣干す書齋に夜風招じ入れ

七月十日

夏の朝歩幅小さく走る人

七月十二日

雨を逐え祭半天着た子供

七月十三日

日本の軍が万里のバビロンに使役せられる防人として

七月十四日

屈惑に山近くある梅雨晴れ間

七月十五日

六つ七つ初蟬名乗り時運ぶ

七月十七日

広い運動場の周囲を、フードまでかぶって、日焼けの手当てをして、夫婦であろうか、男が前を、女が二十歩後ろから、規則正しくひじを曲げた腕を振って、正確な歩調で歩いている。乾いた運動場には、水の流路が残って、低い雲がそれをながめている。・・・

七月二十三日

梅雨明けを待てず燕が演舞する

七月二十六日

藤棚の下でやすらぐ夏陽射し

緑陰に無数の円を陽は結ぶ

いくつもの太鼓の連打土用の夜

遠ければ太鼓の音は熱狂を冷やす夜風に静かに響く

七月二十九日

おろおろと歩く人あり戻り梅雨

七月三十日

夏田行く赤いバイクのポストマン

七月三十一日

突き進む飛行機雲が天画し梅雨の終わりを高らかに告ぐ

八月五日

存在の不思議を踊る極楽鳥

「舞いなさい」

舞いなさい

タンビカンザシ風鳥よ

人間のいかなる衣装も

いかなる名手の振り付けも

君にかなうはずはないのだから、

舞いなさい

タンビカンザシ風鳥よ

胸元の、人には再現不能の輝きを発して

六つの黒いかんざしを絶妙の間隔に広げて

その形姿と舞踏はまさしく君が勝ち得たものだから、

舞いなさい

嘆美の舞を

タンビカンザシフウチヨウよ、

八月二十九日

無窮花落ちやがて虫鳴く沈思の夜

八月三十日

数々の夢幻の如く遠花火夏の終わりに我ここに在る

雷鳴も轟き渡る遠花火

秋立てば遠きかのもの有縁なり



雷光が全日照らしなにもがこれこのように来たかを示す

八月三十一日  
この国のあの戦争の映像がかすむ眼通し心むねを貫く

九月一日  
小人の権に高邁窒息す

九月四日  
黒蝶が連れ立ち夏の果てを行く

九月十日  
夏去らぬ照葉樹林の中を行く

風に秋大吊橋に揺られ立つ

九月十八日  
有り体をせつせつ歌うキリギリス

ああ世界が秋の夜としてここに在る

九月二十一日  
商店のビニール袋舞い上がる長いデフレの圧力の下

九月二十二日

若き僧バイクに地図を持つ彼岸

秋旱猫の血乾く道を行く

南天の木を抜く人の秋彼岸

九月二十六日

白秋の風にあおられ黒き蝶

青北風の吹く海を見る志賀の白水郎

十月二日

「無題」

かつてあった

感じているこの享受が

現実に望み得る至福の時であるという時間が

今、そのような時間の享受を

望むことが許されてほしいものだ

かつてあったと

十月三日

壊死しつつ我が神経の先端がその状況を刻々知らず

何のため人は生きるか寅さんが答える場面なるほどそうか

十月六日

五斗米を「改革」という演技して稼ぐ世の中ただ呆然と

氣息持し天地の間に、秋の暮れ

「注釈1」

「正しい氣息によつて生きなさい」と五柳先生は教え

「いかに死ぬかを学びなさい」と元法官は説いた

「注釈2」

愚鈍の身は開口かろうじて息し

貧朴の心は決悟を探しあぐねる

十月七日

「蜘蛛が恃む糸」

わたしの肩にクモが降りて警句を吐いた

「蜘蛛の智慧はたかが知れているが

わたしは立派に生きている

今天上から降りてきた、と言っても

君にはそれを否定できないだろう

堂々と生きている者を

誰も見下したりはできないものだ」

そう言うと、クモはまた昇って行った。

十月八日

梔子ももう一度咲く十三夜

洪柿のたわわを磨く十三夜

十月九日

「月を仰ぐ種族」

昨日、十三夜を楽しめたら

今日は、十四日の月が美しい

少し雲があるが清らかな月を見上げて  
秋の夜をいつまでも愛でる  
それがわたしの国の不易の慣わしだ

そんなに見上げていたら首が痛いだろうって  
いえいえ、長い間の習慣でわたしたちの頭は  
少し上をむいてついているのです  
心ゆくまで天を仰ぐことができるように  
それがわが種族の印しづけられた特徴だ

それではこまるだろうって  
いえいえ、世間の暗い面を見なくてすむから  
清浄な心もちを保つことができます  
くるしいことがあっても耐えることができる  
思いは地球を超え出るのだから  
それがわたしたちの麗しい資質だ

昼間太陽が照っているときまぶしいだろうって

お天道様は慈悲ぶかく智慧をさずけてくださった

わたしたちはつばの広い帽子をかぶっている

地上に映ったその姿のなんと優美なことか

わたしたちの横顔を見ればためいきが出るだろう

知的なあごの線と和やかな頬に

それによってわが市民を一目で見分けることができる

お尋ねになる前に答えれば

いつも頭を下げることなく傲慢だと勘ぐるのはあたらな

卑小なことが見えないぶん想像力があるから

人の悲しみがよく分かる

むしろわたしたちのことを高邁と呼んでほしい

さてまた、春夏秋冬どの季節にでも、月夜に

そのように月の光を浴びて過ごさない

月の光には身と心を変える力があります

ひそやかにあなたのDNAを修復してくれます  
そうすればいつかわが市民になることも夢ではない

十月十五日

神舟を浮かべる空のうろこ雲

十月十八日

コスモスが日向の王墓跡に咲く朝陽夕陽のことほぐ丘に

夕陽照るすすきも花と咲き誇る

十月二十日

手を合わせ寝棺の中に居る夜長

十月二十七日

傘さして秋晴れの下行く男（どんないわれがあるのだろうか）

落ち葉吹く機械の音が天高く昇る世に在り乾く木石

かくあつて朱玉と紅葉得る木あり

騎乗する姿照らされ秋の暮れ

現代の騎士が二輪車に拍車をかければ、  
後方より迫る四輪戦車の頭光に照らされ、  
威風は城壁に歴然と映る。

ようよう追撃をかわし辻を過ぎろうとすれば、  
何やら小道具を耳に当てる声を上げながら、  
新車の戦車が鋭角に顔前に切り込んで来る、  
戦の作法もあつたものは、

まこと真の騎士の憂いは晴れぬもの。

それでも敵をしりぞけ夜道を飄々帰館いたした。

「大津の三郎武勇譚」

十月三十一日

稲盗む者ある乱世選挙戦

世に後れ月下美人に深き秋



十一月二日

秋深め秒針の音犬眠る

芋吹いて口にころがす閑居の日

秋の蚊を打って読み入る乱世の記

十一月五日

葬儀場の門で蠅螂死を学ぶ

学ぶのではなくてただ先例を習うだけか。

十一月八日

黄金の装いもせず银杏散る

(季節不順)

秋日中樂しみ跳ねる楢円形

冬立つ日腕まくりして家補修

十一月十日

しぐれ道荷に耐え詠う心持し

掌を広げ机上をポーンと打ちアランのプロポひろげ聴き入る

十一月十三日

乗降の客無くバスは秋の道

人無くて事とどこおるそぞろ寒

彼らには彼らの、ぎこちない動きをさせておけ

わたしはわたしの、自由な舞を生み出そう

十一月十四日

澄む水に聴いて湧き出す歌を待つ

十一月十六日

遠出する機会も少なく、テレビの映像を見て、

虹の下野菊にかかる瀧しぶき

何事か、紅葉の瀧に千々の雪

十一月十六日 野イチゴを食んで都市見る丘の道

拾い上げ柿の葉の赤飽かず見る

十一月十七日 小人の暴言嗤う小春かな

身を大いなる小春にゆだね

十一月二十二日 晴天を約す夕焼け、冬に立つ

十一月二十三日 汽水から海へと冬の蝶の夢

十一月二十九日 わたしの頭蓋にかすかなさざなみ、濃い紫の小さな花の

十二月一日 木枯らしに低く嘯く桜の葉

梢を離れ初めての舞

十二月三日 一日に「プロポ」一服身心に体操させて優美な姿勢

十二月七日

清霜降月桂樹白  
海津波静漂船泊  
夜半覚醒知境涯  
天地間人被仮託

気がつけば風吹き抜ける天の野にたじろがず立つオリオンと在る

十二月十四日

長湯して灯油売る歌聞く夕べ

微笑した賢者アランのゆるぎない言葉かみしめ姿勢を正す

十二月十六日

冬の夜にぽつりぽつりと語る雨

十二月二十日

軒下でサザエを割って腑分けする命の不気味見る冬の闇

十二月二十一日

おだやかに冬の日暮れて頭垂るこうへ

十二月二十三日 金券を返す文書きくたびれて眼を閉じて聴くストーブの音

望み持つ冬至を越えてあるべき身

十二月二十六日 同年の隣家の人の訃報聞く不定にあらざ目前にあり

十二月三十日 姪の結婚式でハワイにいる。豪勢な旅だ。

重光の名を記す文書展示する艦上過ぎた五十八年

特攻の数日前に生を得て今舷側のくぼみに見入る

重光の立った甲板冬陽射し

十二月三十一日 半月が椰子の樹上にかかる夜風風ぐ浜に寄せる白波

花火上げ行く年来る年祝う浜

二〇〇四年 正月  
徐山亭 謹製



『万葉集』卷三挽歌

大伴坂上郎女

……

生ける者

死ぬといふことに

免かれぬ

ものにしあれば

たのめりし

人のことごと

草まくら

旅なるほどに

……

……

大伴家持

よのなが  
世間し常かくのみとかつ知れど

痛き情こころは忍びかねつも